

各種サービス改廃のお知らせ

日頃より上田映劇をご愛顧頂き、誠にありがとうございます。
本日は皆様に大切なお知らせがあります。

当館は 2017 年 4 月から、私たち「NPO 法人 上田映劇」の手により定期上映を再開し、以来順調に観客動員数を伸ばし、上田市初のミニシアターとして着実に定着して参りました。しかしながら、2019 年 12 月に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が発生すると、みるみる観客動員数が減少、回復の兆しはみられるものの、以前の水準には遠く及ばない状況が未だに続いています。また、COVID-19 が発生して以降は、当館を利用したイベント等のキャンセルが相次ぎ、収益事業の柱としていたレンタルホール事業が壊滅的な打撃を受けました。映画や映画館を巡る状況も日々刻々と目まぐるしい変化をみせており、もしもこのままの状況が続いてしまうと、いよいよ来年度は当館が定期上映を継続できるか否か、というところまで影響が及ぶ可能性があります。

そこで当館では、経営という側面から劇場としての姿勢（サービス）を見直す好機と捉え、令和 4 年 7 月 1 日以降順次、思い切ったサービス改革を推し進めて参ります。これにより皆様には今まで以上にご不便をおかけすることとなりますが、これもただひとえに“街の宝物”とも言える（少なくとも私たちはそう思っている）歴史ある劇場を、次世代に繋いでいくための選択でございます。

もう一度、地域の皆様に劇場に足を運んで頂きながら、経営の立て直しをはかって参りたいと思います。何卒ご理解とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

NPO 法人 上田映劇 理事・スタッフ一同

令和 4 年 7 月 1 日より改廃させて頂くサービスは以下の通りです

◎駐車券サービスの廃止

鑑賞金額に関わらず、今後、駐車サービス券は配布致しません。ただし、当館特別会員の方に限り、映画ご鑑賞 1 回につき「海野町パーク 1 時間無料サービス券」を 1 枚進呈致します（映画鑑賞時限定）。

◎上田映劇ジャーナルの休刊

2022 年 7 月号の発行をもって無期限休刊と致します。会員の皆様への郵送もございません。どうしても紙面で上映時間を確認されたいお客様は、その都度、劇場窓口にお申し出ください。また、これまで紙面に掲載していたコンテンツは、今後、当館の WEB サイトで引き続き閲覧できるよう検討しています。

◎フレフレ割の廃止

割引サービスの廃止に伴い、当館での古本回収は致しません。

◎「映劇はんこ」のあり方について

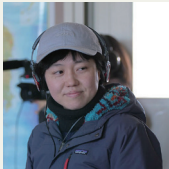
これまでは当館で鑑賞していなくても、またどんな場所にでも押印していた「映劇はんこ」ですが、今後は基本的に会員の方（会員手帳）、もしくは映劇手帳をお持ちの方が、“当館で映画を鑑賞された時”に限り押印させていただきます。映劇手帳以外への押印をご希望されるお客様、また、遡っての押印をご希望される方、当館以外で鑑賞された方が押印を希望される場合は、いずれも有料サービスとさせていただきます。

- ・押印は基本的に「映劇手帳」もしくは「会員手帳」のみ
- ・映劇手帳以外への押印、当館以外でご鑑賞の作品のはんこ、上映終了作品のはんこを押印する場合、1 回につき ¥500

EIGEKI COLUMN

第 56 回

ライバルたちの はなし



この前、近場の映画館では今なにかかっているかしらと調べていたら、舞台挨拶付き上映の情報を見つけた。その作品はオムニバス形式で、私の知り合いの監督が数名参加しており、彼女彼女らも舞台挨拶にやってくるというので、こんな地方で会える機会はそうないぞと思い、雨降るなか出かけてみた。

前の方の席でじっくり映画を味わって、上映後に舞台挨拶をたっぷり聞いてやろう、と意気込んで、前から 2 番目の席で構えていたら、上映「前」の舞台挨拶だったので、ちょっと恥ずかしかった。お客さんの入りはまばらだった。映画には、それぞれの監督の現在地が映っていて、しみじみした。

いつか誰かから「映画監督になんて、生まれて初めて会いました」と言われたことがある。意外といいますよ、映画監督、世の中映画監督だらけですよ、と答えたら、そうなんです、と笑われた。私の周りには、大学の先輩後輩、大学院の先輩や同級生、後輩に映画監督になられた方がたくさんいるし、映画祭で出会った同期デビュー的な監督たちもたくさんいる。

とはいっても、私は普段あまり、映画監督同士でつるむほうではない。ときどき先輩の監督さんに誘ってもらうととても嬉しく楽しいが、誘い下手な私はなかなか自分から誘えない。知り合いの監督の上映に足を運ぶことも、正直少ない。恥ずかしい話、やっぱりどうやら、ライバルなのだ。素直に事を運べないのが、ライバルだ。

しかし地方に引っ越したら、変なライバル心やしらがみがつるんと剥がれたらしく、今回の舞台挨拶ではみんなの顔が見られてとても嬉しかった。みんなそれぞれ、苦労しながら映画をつくっている。お互い元気で頑張りましょう、と近ごろは素直にそう思う。

tsuruoka keiko

鶴岡 慧子 映画監督／脚本家

上田市出身。神戸芸術工科大学映像表現学科助教。当劇場理事。初長編作品『くじらのまち』が、PFF アワード 2012 においてグランプリ & ジューストーン賞を W 受賞、その後世界各国の映画祭にて上映される。2015 年『過ぐる日のやまねこ』で劇場デビュー。最新作は西加奈子の同名小説が原作の『まく子』。信濃毎日新聞「シネマ魅どころ」に映画評を隔週連載中。

第 38 回

ちょっとひと息



先日、テレビでお写経の番組を見ました。お寺の道場内に定点カメラを設置して 72 時間撮影し、そこに携わる方にインタビューする番組です。そのお寺は、決められた時間内なら予約なしで、お写経が出来るという事で、様々な方が訪れていました。仕事帰りの方、毎週いっしょる方、留学生が故郷の両親の健康を祈念してお写経に来たりと、理由は様々で、興味深く見る事が出来ました。

そして数日後、ふと、私も気持ちを整えようと思いたち、お寺でお写経をすることにしました。その日は、朝から大雨。一瞬、気持ちが萎えそうになったのですが、一度行くと決めたので、支度を済ませ、お寺に伺いました。境内に何うと住職さんが迎えて下さり、お写経の意味や作法を丁寧に教えて下さいました。合掌し硯で墨を擦り精神を統一！

しかしここで、私の雑さが出てしまいました。1 滴 1 滴水を出しながら墨を擦るはずが、いきなり数滴の水が！慌てて出してしまった水は、戻るわけありません。その後はただただ、自分に喝を入れながら黙々と墨を擦り、準備を進めました。合掌した後、お写経を始めるのですが、一文字一文字、筆入れをすると、何故か途中から涙が溢れてしまい、暫く筆が止まってしまいました。

お写経することだけを考えるはずが、集中力散漫な自分が出てしまい、なかなかうまくいかず、なんとも要領を得ないお写経となってしまいました。

ようやくお写経を終え道場を出ると、住職さん感想を聞いて下さいました。何故か心が乱れてしまい、涙が出て、集中力が散漫だった事を話しました、住職さんは優しく受け止めて下さり、有難い御言葉をいただき、そしてお寺を後にしました。終わった後は、清々しい気持ちと、思うように気持ちが整わなかった反省と、複雑な心境でしたが、それもまた今日の自分。それで良いんだと、思えた 1 日でした。

tsukikage hitomi

月影 瞳 元宝塚歌劇団・娘役トップスター

長野県上田市出身。上田市観光大使。当劇場理事。1990 年「ベルサイユのばら」で初舞台。入団 2 年目で新人公演、初ヒロインを演じる。1997 年「誠の群像」で星組トップ娘役となる。その後雪組に組替えし引き続きトップ娘役としてミュージカルやショーなどで活躍する。2002 年に「愛燃える /Rose Garden」で退団。退団後は舞台、コンサートや映画など、活躍の場を広げている。

vol.53

ビーよりディー 気持ちは $P \leq D$



監督志望の僕がプロデューサーになって、フジテレビグループから独立して初めてフジテレビのドラマを作ったのが堂本剛主演の『33 分探偵』だった。独立してから 3 年後のことだった。福田雄一監督とのオリジナル企画で古巣のドラマに復帰できた事はとても嬉しかった。解決済みの事件を難癖付けて放送時間ギリギリまで持たせる探偵という何とも変わった内容のドラマだった。フジテレビ内では発表ギリギリまで『33 分探偵（仮）』として置かれていた。タイトルの所以は土曜ドラマの枠の実尺が 33 分だと聞いたからだ。遂にプレスリリースという時に広報部から「そろそろ正式タイトルをお願いします」と連絡が来たが、僕と福田さんは「そのままです」と返した。こうして『33 分探偵』は正式に「フジテレビ史上最もゆるい探偵のドラマ」として放送されることになった。連続ドラマを監督するのが初めてという福田監督の撮影はなかなか大変で、毎日深夜まで及ぶことがしばしばだったが、堂本 × 福田の笑いに関してのセンスは息がピッタリと合い、現場は終始笑いが絶えなかった。フジテレビのドラマでこんなものをやってしまっただけ良いのか？という不安は無かったわけではない。しかし、新しい笑いを『THE3 名様』で作り上げたから登板叶ったわけなのだから、DVD ではなくテレビで自分達の面白いと思うものをやり切るのだと思いながら制作していった。笑いをやる時は真面目にやる。これを福田さんに教えてもらった僕は作品のルックも真面目に真面目にと作り上げた。ポスターもカッコいいものに。タイトルバックもカッコいい写真を使ったものにして『THE3 名様』のパフェ親父こと志賀廣太郎さんの低い声でナレーションを付けてもらった。遂に、放送初日を迎えた。土曜日放送なので月曜日に視聴率が出る。月曜日にポニーキャニオンで打ち合わせをしていたら携帯が何度も鳴った。「いやあ、面白かった!!」「新しいのに懐かしい!!」「よくぞ、あんなドラマを作ってくれた!!」と放送前の不安が吹き飛ぶほどの賛辞が寄せられた。視聴率は同枠ではまずまずのスタートを切った。このドラマを皮切りに福田雄一監督の名前は業界に轟くようになった。DVD で見られないものを作っていたチームは遂に日の目を見たのだった。（つづく）

moriya takeshi

森谷 雄 プロデューサー／映画監督

愛知県生まれ。株式会社アットムービー代表。当劇場理事。「天体観測」(フジテレビ)、「ザ・クイズショウ」(日本テレビ)、「深夜食堂」(毎日放送)などのドラマをプロデュース。映画作品は『しあわせのパン』(三島有紀子監督)、『曇天に笑う』(本広克行監督)ほか多数。監督作品に『サムライフ』がある。最新作は『ミッドナイトスワン』(内田英治監督)。